

手銭有秀句文集『もくづ集』

—手銭家所蔵資料紹介(二)—

佐々木 杏里

(公益財団法人手銭記念館学芸員)

摘 要

出雲市大社町手銭家に伝来する俳諧資料の中から、手銭有秀による自選句文集『もくづ集』を紹介する。この資料は、大社における文芸活動の実態を見る上で、多くの示唆を与えてくれる貴重な資料である。

キーワード…もくづ集、俳諧、手銭有秀、手銭記念館

はじめに

『もくづ集』は、手銭家五代当主であった官三郎有秀(明和八年(一七七二)～文政三(一八二〇))、号は衝冠斎、薄月庵、雅硯など。以下有秀と記す)によって編まれた自選句文集である。

有秀は、明和八年三月三日、四代此三郎の長男として生まれ、寛政八年(一七九六)父の死により五代目当主となり、千家家(出雲大社国造家)近習格、杵築六ヶ村大年寄などを勤めた。

文芸、篆刻、面打、能楽、絵画など様々な趣味を嗜んだらしく、本人の手による面(「すさのお」「山の神」)の神楽面二面を大土地神社に

奉納している)や印、水墨画など様々な作品が残っているだけでなく、有秀の署名や蔵書印が記された諸芸に関わる蔵書資料も多い。

その中でも俳諧に格別熱心であったことは、多くの句集に入集していること、『萬家人名録』(手銭家蔵書番号641)に載っていること、残っている草稿や詠草などの量の多さからも確実であろう。

『蕉門俳諧極秘聞書』(同45)の中に「神文・・・寛政八丙辰歳六月日/手銭官三郎有秀書/冠李尊師 百羅尊師 両宗匠」とあること、広瀬百羅追善集『あきのせみ』(同76)において、「門人 衝冠斎有秀」として冒頭の「枕言葉」ならびに百羅の肖像を描いていることなどから、有秀は、広瀬百羅、手銭冠李(手銭家三代季硯の弟)に深く傾倒し、実際に教えも受けていたと考えられる。所蔵俳諧資料の

うち冠李や百羅に由来すると思われるものについては、有秀が二人から直接譲り受けた可能性も高い。有秀は手銭家の蔵書形成においても、大きな役割を果たしていたと言ってよいだろう。

〈書誌〉

書型：写本。中本一冊。袋綴。

表紙：本文共紙。包み表紙。

寸法：縦20cm。横14cm。

題簽：左肩無辺。「もくづ集」と墨書。

序文：「于時／文化四丙卯のとし秋／白澤園「白澤」(白文瓢形印)」

字高：16.5cm。(序文卷頭「とし頃・・・長き折」を計測)

丁数：全72丁。墨付30丁。(30丁裏より全て白紙)

〈解題〉

有秀が、自身の句文や文章をまとめたもので、序と十八題の文、句文からなる。

序文の年記は文化四年(一八〇七)。二題目の「いそ枕後の序」(寛政十年(一七九八)から最後の「庵筆白澤園額面の書」(文化十四年(一八一七)までの間に年記のある章がいくつもあり、そこから見る限り、本文はほぼ年代順に並んでいるように見える。また、数カ所の見消ち部分があることから、序文が書かれた文化四年以降、新たな章を折々に書き足しながら、全体の推敲、校正も続けていたと思われる。

序文はあるが跋文がないこと、「庵筆白澤園額面の書」の三年後に筆者が亡くなっていることを考えると、手塩にかけていたが未完と

なった句文集ではないだろうか。

〈凡例〉

翻刻にあたり、私に句読点を補い、改行を改めた。また、概ね通行の字体に改めたが、一部原本の表記を残した。ルビは本文のままとした。

原本の各丁片面の終わりに当たるところに「をつけ、()内にその丁数および表・裏(オ・ウ)を示した。

誤記と思われる箇所も原文どおりに翻刻し、適宜その傍に「(マ・マ)」と記した。

見消ちは「(見消ち)」とし、訂正された語句がある場合は見消ち部分を傍記した。明らかに書き損じと思われる部分については、訂正後の本文のみを翻刻した。

判読が困難な箇所は□で示した。虫損箇所は、文字数に見合うように□で示し、その傍に「(虫損)」と付した。

推定した文字については、難読箇所は◇で囲み、虫損箇所には「(虫損)」と傍記して記した。

参考のため、原本の図版を最後に示した。

〈翻刻〉

(表紙) もくづ集

(見返し) 白紙

〔印〕

とし頃、春雨のつれづれ、秋の夜の長き折ふし、稽古のためにかけるくさくさのものあり。おろかなる身のしハさ、誤り多かることなれ

ハ、残しをけるもいとつかしきことなから、此ま、捨るも本意なき心地」(一才)するより、一冊となしてもくつ集と八名つくるなり。もし高見の輩見ることありとも、杜選の多きを笑ふことなかれ。

于時

文化四丙卯のとし秋 白澤園

「白澤」(朱瓢形白文印) 「(一ウ)

もくつ集

案山子の文

かり田のあとの気色淋しく、ほつれし笠に世を背きたる老ほれあり。降らぬ日もみのはなさず、弓矢とる手も秋風のいとおほつかなくそ見え侍る。いかめしき音やあられと興せしも、浪かきわけし陣雨か笠も、皆行すへ」(二才)ハ此さまならん。山吹のみのひとつたになかりし時も、此老翁は持つらんか。許由か捨たるふくへかして歌になしたる、いとおかし。

此上は何になるかも捨か、し

いそ枕の後序 「(二ウ)

呉楚に魂をはしらするにはあらで、もろこし近き旅寝せし露丸のぬしか、心つくしの家つとに、かの釣連のなかめを記して頭陀の底にかくしをけるを、此ほと予に清書せよとなり。されと、かなのけちめもしらぬ身の、山鶏をもて鳳凰と呼ふに似たれハ、ふかく辞すれともゆるさす。もとより人に見すへき」(三才)にもあらされハ、旅のつかれをもたすけむとて、終に其需に応してつたなき筆を染るならし。

于時 寛政十年晩夏日

月の友集序 「(三ウ)

むかしの翁の正風をしたひて、ひとりわか師の誹諧は、敢て門人の意気にもよらす、唯此道の本理を守りて、心は教誡のはしとせらる、より、門葉遠近にはひこり、貴賤老若となく、なへて染習ふ人すくなからず。句々は庫にあまり、車にみてるを、厚志の輩、此ま、おかんもほみなしとて、各ひそかに是を集、四季をわかちて小冊となし」(四才)けるを、仙菊亭の主人、又是を清書して月の友と題す。されと後出の作例とするにハあらず。只同竈の罪なからしめんかためにとなん。」(四ウ)

のなりの解

世にのなりあ□^(掛)けり。人ある事をしりて、用ゆる事をしらす。また用ゆる事をしりて、其妙所をしらす。常にいふ、つれなき女の手すさみ^(写く見消す)と心得るハ、大なる非なり。此妙所を探り得て儒に孔子、仏に釈迦とあふくへきハ、いさゝの浜にみたり。其名を問へハ、仙安、松露、冠秀、いつれも此道にたけし赤角」(五才)の才にして、世に比する学者なからしむ。されと隠徳外にあらはれかたく、池中の龍、洞底の獅のたくひなれハ、天下にしる人なし。予、是をひそかにうか、ひて、今三師の妙所をいふに、仙子ハ、生得小短也。故に是を用て六尺ゆたかのますら男となり、大敵に向ひて痿ます。遂に敵陣にわけ入て前後^(掛)左右にあたり、ころはくゝの声々、山にひ、き」(五ウ)野にみちて、流るゝのりハ泉のこづくに湧出で、□□^(掛)袋の物をとるか如し。松子ハ、もとより大頭也。天生大力にして身ほそし。ゆへに是かからたをかりて敵を威す。たとへハ龍頭の馬面のことし。冠子ハ、其軀大な

り。ゆへに是か力をからすといへとも、しかれとも非力なり。一戦にしてつゝくことあたはず。こゝにおゐて、是か力をかりて先陣とす。大敵数戦の後、自出て打勝事妙なり」(六才)といへり。いつれも、其用ゆる所ハ異なれとも、敵をほろほす事、奇々妙々たり。能是を用ゆる事を得ハ、虚城となることなし。城虚すれハ身ほろふ。人寿かきりありといへとも、若ふして死するハ定命にあらず。能守らざるゆへなり。世ハ夢の世にして、後葉に名を残すを本意(虫損)とすといへれども、長命ならずしてハ物を遂ることかたし。遂されハ名の誉あるへからず」(六ウ)ふかく慮て、城を守るを且夕に考ふへし。あなかしこ

松茂亭四十の賀に送る

師の教誡をむねとし、言葉に弥生の華をさかせ、こゝろに良夜の月をすまし、ことし初て老に入ものハ、松茂亭の主人なりけり。

山ふかみ踏(ハツマ)も感ハす桜かり 「(七才)

日々庵の主人四十ちの賀に送る

素雪丹鳥のいさをも、既に不惑の春に至れハとて、同胞の誰かれをかたらひ、けふや嘘楽主人のたかとのにのほりて、祝意をうたふ。

老(虫損)の名を先呼初む翁草 「(七ウ)

十囲老士の六そちの賀に送る

心つくしの田めぐりして、たちねのほろをとけつゝ、世に望めることとなけれハと、素鷲川の清泉に心をすまして、ことしむそちの春をことふく人は、老せぬ山のほとりなる広瀬何かしの主人なりけり。

ひとつつゝ耳にと、きて百千鳥 「(八才)

風俗文選

手足辯二

汶村

甲冑のよろひかふとをあやまり、行燈桃燈をとりちかへたるむかしより、国中みな誤りおほえけれ(虫損)バ、却てあらためたる人を、あやまりといふ」(八ウ)も理りならんとかけり(まじり見解)。此文意を察するに、甲冑と(虫損)□□から、かふとよろひとこそいふべきを、よろひかふと、いふハ、むかしよりのあやまり也。また、ゆくともし火が、ちやうちんにてあるべきを、とりちかへたらんといへる心にして、一通り尤に聞え、おもしろくかきたるよふなれと、是は汶村が大なる誤ならん。甲冑(カウチウ)と書て、よろひかふと、よむハ、日本の古事にして、和学をしらぬ人ハ解せぬ事也。先つ」(九才) 甲冑(カウチウ)と文字をつくるハ、本牒の次第にして、甲(カウ)は頭にいた、くもの、冑(ヨロイ)ハ身にまとふものにして、頭にきるものを先(キ)にし、身にまとふものを後(チ)にするか、物の次第本牒なるゆへ、字音につゝくる時は、甲冑と書か次第也。是をかふとよろひとよむ時は、書たる文字の通りにて、さもあるべき事のよふなれと、是をよろひかふと、よむか、和学の古風習ひ也。日本ハ、文字に敢てか、はらす、語路(コトミチ)とて口うつりのよきを第一」(九ウ)にしたるか、此国の教え也。ゆへに日月(ヒツツク)と書ても、ツキヒとよむか語路のよろしき也。昼夜(チウヤ)とかけと、ひるよるとハいはて、よるひるとい、山海とかけと、やまうみハ語路あしきゆへ、うみやまといふ也。此類、数々の事にして出すにいとまあらず。すへて語路にて、口うつりのよろしき、言よき所を專にしてよむか、此国の風也。甲冑(カウチウ)とかきて、よろひかふと、よめハとて、甲(カウ)をよろひとい、冑(チウ)をかふと、わかるにハあらず。ひとつにして、いろく」(十才)よみよきよふに読か、ことミ

ち也。日本と書てやまと、よむに、日の字にやまのよみもなく、本の字にと、いふよみもなければ、かくよむか習ひ也。此類、幾つもある也。扱又、此甲冑を着るに、ひとつの次第あり。甲を先に着て、よろひをのちに着るものにあらす。先冑ヨロイをきて、のち甲を着るものと見えたり。されハ、是を着る次第をいは、よろひかふと、いふも、またことよりは也。是ハもの、表裏に□□^(虫損)神道日月の伝にも、表系実系とてあり。」(十ウ) 表系といへるハ、日の神を姉君と奉り、月の神を弟^(虫損)神と唱奉る。是、表系にして、文字二日月とつ、くる字音の次第也。又、月の神ハ先にあれます神にして、日ノ神のちにあれますか、実の次第なるゆへ、文字の訓にて八月日と訓する也。されハ、日月と書てつきひといふか、音訓にて表系実系をしらすの秘也。此類、和学に甚多し。余ハ学んでしるへし。扱、行燈挑灯をとりちかへたるハ、むかしより国中みな誤り」(十一才) おほえけれハと書たるハ、汶村いかなる心ならん。ゆくともし火といへは、ちやうちんハ持ありくゆへ、行ともし火かちやうちんによからんとの事なるへきや。不突撃のさたならん。字彙行ハ何庚ノ切音、衡^{字林玉篇}ツラナル●ヲコナウ●シワサ●ミルなど、よみ、又^{字彙}燈ハ都騰ノ切音、登^{字林玉篇}トモス●トモシヒ●アブラツギなどよみて、行燈と書てともし火をおこなふと訓すれ^(虫損)□□あん^(虫損)とふかあたり前の道具也。ゆくといへは」(十一ウ) とて、ちやうちんによするハ非也。又字彙挑ハ他彫ノ^(虫損)音^(虫損)□□撥又取也。又、杖荷也。往来ノ貌也。玉篇カ、クルトル○ニナフ○ユキコウとよみて、今の世にもちありくちやうちんに不動の文字也。あんとふにしてハ、あたらぬ字也。灯は燈ノ俗字也とありて、ともし火といふ文字なり。されハ、あんとふちやうちんをとりちかへたりといふことハ、またたくひなき誤にして、笑ふへきの甚しき也。汶村も古翁の門

人なれハ、かくのことき杜選」(十二才)をいふへきにもあらねと、鼻の先学文と見えて、後世の笑草を残せること、いとつかしきこと、も也。古翁ハ和漢の道に通達して、片言の誤りをきかす。かなしい哉、翁迂化の後、十有余歳を経て、此風俗文選の著述ありけるゆへ、かく放言をなせるならん。去来、丈草の、猿も木より落、許六、支考か大口も、鼻の先^(虫損)はかりと見へて、や、もすれハ、老莊の孔孟のとくされ儒者の糟粕をねふりて、此国の道を」(十二ウ) しらさるゆへ、汶村か誤りをもた、さす、文選に^(虫損)入集して末代に恥辱を残すこと、かなしむへきの甚しきなり。落柿舎の文選の序に、先師ひとたひ思ひ立給ふこと侍れと、心に叶ふ物稀なれハ、むなくやミぬるも十とせ余り五とせならん、とかけるを見れハ、文ハ多くありても、翁の心に叶ふもの稀なるゆへと見へたり。是等を見ても、貴むへきハ蕉翁なり。我師常にい、けらく、蕉門に十哲ありといへとも、」(十三才) 先師と仰くへきハ古翁のことなりと。且夕にしめされたる師恩の深きこと、今心根にしみわたり、涙をはらひて筆をと、む。

三界無庵金銀不淨財ノ考 「(十三ウ)

世に、誹諧の深入したるか国々をめくり、誹諧のほむをしらすして、誹人といへハ、むりに風雅に世の常躰を嫌ひ、ゆかみたる杖にねしれたる笠と出かけ、扱かの我家を捨て、三界無庵といへる古きこと葉をとり違へ、金銀ハ不淨財杯と、ひとへにつたなき物のよふに思ひ、清貧を好み、今日いとなむものもなく、人のものをあてにして、冬くれハ綿のひとへを願ひ、うへてハ夕の一飯を乞ふて、いつれ栖家とせるかた」(十四才) もなく、雲水の行衛しられぬ境界となり果て、すゑハいつくの土にかなるや。希ふ人もなく仏家にはゆる無圓

法界といふへき次第、あはれにこそ思はれ侍り。此三界無庵といへること、一通り聞えたるよふにて、其本意まされありて、心得ちかふ人世に多きゆへ、先師さりつの翁、深くしめされたり。師ハよく是等の事をもさくり得て(虫損)しめられたれと、教のこと葉多くなるより、」
 (十四ウ) 唯ひとへに三界無庵金銀不浄財ハ心得違ひなり(虫損)手みしかにしめし、捨てとらぬよふに、かゝれたる書あり、是にてすむ也。しかれとも、猶予か考たる所を今かくに、三界無庵といへる本意ハ、ことに面白きさかひなり。先つ其人くゝに身分の居り所、行状あり。町人百姓の身の上にていふに、五十歳に至るまでハ、家業をつとめ、其(虫損)あい(虫損)□にハすける風雅をもて、身をおさめ、家をつくへき」(十五才)
(名勝になる見消す)
 子なき時は、養子をしてたしかに家業相続の人をたて、扱五十歳を越えなハ、家を譲り、家業をわたし、其身ハ隠居して、すきの風雅に遊ぶへし。されハとて、別に隠居所をかまへ物すきの作事をくハへなとすれハ、金銀を費してよからぬ事なり。只同居のうちに小座敷のひとつもかまへ、世をはなれて行たき所も心のまゝにして、定命をまつへし。されハ我家ハ子にゆつり、外に家を」(十五ウ)もたぬから、いつくへ行てもわか家とてハなく、身もあ(虫損)□り風雅の道も心よくわたる也。されとも、本家ハかわらす立て、子孫相続うたかひなし。是を三界無庵といふへき事ならんか。夫を心得違ふて、大切至極の家をやぶりて、先祖のまつりをなせる事もならぬよふになりて諸国を遊行するを、三界無庵と心得たる人多し。大なる非也。又、金銀不浄財といへれハ」(十六才) 金銀ハもたぬかよし、有れハあるにまかせて有か上にもほしくなりて、大欲無道の氣随おこるゆへ、なきか清貧の賢者也とて、大切の金銀を不浄財と心得たる、又たくひなき非也。さよふの事にハあるへからず。金銀ハ七宝第一の宝にして、和漢ともに是にま

されるたからハなし。至て大切の宝也。(虫損)されハ無用の事に費さず、みたり遣ハすして大切に守り残べし。しかれとも、」(十六ウ) 又、遣ふへき所にて遣ハされハ、其徳なし。むりにおしみて人をむさほりなとしてハ甚しきかいあり。金銀の欲によりてハ、人と中をたへ、人をかいし、身をそこなふ、みな此欲よりなすことなり。心得あしけれハ、大成不浄をまねく道具也。ゆへに、大切に守り、能我身の分限を計りて用ゆへし。あるかうへに望むハ、」(十七才) 則心の不浄也。身のたけ相應にしてうへを望まず、分限に至て遣ひ捨す、能ほとにあつかふへし。やゝもすれハ、望みをおこして心の不浄をおこすものハ金銀なり。むかしも、ある学者「あり(見消す)」世に高く名をあらハしたり。いつの頃よりか、金銀の欲出て、いろくゝの伝来事をはしめ、不思議の業を見せて、多くの愚人をまよハして、金銀を集めたりけるか、天道に叶ハぬにや、いつし」(十七ウ) か信者もうとくなりて、後にハ悪評にあへりし事あり。(虫損)是等、金銀に目とれて、不浄に心の落入たる也。心得あしけれハ、大なる罪をつくり、不浄をまねく事のうつり安きハ、金銀の欲よりおこるゆへ、金銀ハ不浄に入安きものなり、心せよかしと、おしへたることハならん。金銀か不浄なる宝也といへる事にてハ、かつてあるへからず。世に大録(大録)の人を富る人と心得たり。富るとは」(十八才) 大身なるをいふにハあるへからず。大身たりとも、夫にひとしき借銀あらハ、富る人とはいふへからず。小身たりとも、借銀もなく、一年のくらしを心よくして臨時のたすけを貯おかハ、事ハ足れる也。こと足れハ富る也。金銀山の如くにつみたりとも、何の妙ハあるへからず。是を遣ハ、妙あらん。遣ふ時ハ、一時にあるへし。兎角足ることをしれハ、常に富る也。(虫損)されハ金銀に望みハなきはつ也。」(十八ウ) 望みなけれハ心の不浄もあるへからず。心

の不浄なき時ハ、不浄財ともいふへからず。能々わきまへたきハ、此境なるらんかし。

山入の後悔

ある日、五六子を倡ひ、いさゝの浜にうかれ出て浦の気色を望むに、北山の流れなる嶋つたひ」(十九才)にあまたの人々釣をたれて余念なく見えけれハ、われくも人ま似せん(掛)と小船に竿さ、せ、呉湖のむかしをつふやきて、終にふた又といへる磯に漕よせ、呂望の世をのかれたるまねひして時をうつしけるに、磯うつ浪のひまもなく日既に西海に落けれハ、いさ帰らんとさ、やくに、浪あらく船(掛)にのるへき心地せねハ、是より山路を帰らんやといふにまかせ、樵路のほそきを」

(十九才)のほるに、日暮て先もわきかたく、道猶たへて登るへき便なし。下らんとするに谷底真黒にしてすみのことく、ひと足も歩むことあたはず。いかにとも、せんかたつきて、各かつらに取つき、石上にまとひして、夜の明るを待んより外あるへからず。仙境に入人は、さそかくのとききこと、もならんと口(掛)にハさ、やき待れとも、互に声はかりかハして、心には神仏を祈るはかり」(二十才)なりけり。かくて、五会の頃にかありけん、はるかの空に人声あり。大に力を得て声をかきりによやくと呼かくれハ、漸答て、何ものなれば今此谷底にありやといふ。口を揃へ、われらハ道にまよひて行暮たり、何とそ火をもて助け給はれといへハ、かのものとも、やかて松明をふりて来り、茨高かやのしけきをわけて、」(二十才)よふやく本道にとりつき帰りぬ。命目出たき祝ひにとて、盃をかたむけ夢のさめたる心地して、わらひあひぬ。予、つくく思へらく、船を恐れて陸地をたとりしハ、命をかるんしさるに似たれとも、暮に近ふ

してしらぬ山路にわけ入しハ、うかつのしハさなり。何事をなすとも、しらする道に入らハ先達なくては叶ふへからず。今日の道をわたるに、師の教を」(二十一才)見すしてわたくしに学ふ時は、必横道に落入て、身(掛)おさまるへからず。身、修まらざるは迷ひ也。山野を行とも、しらする道ハ先達なくてハ必ふみ迷ふへし。道をはなれて人なし、人を放れて道なし。道を学ふは人也。人の行へき道をゆく、是人也。禽獸に道なし。道なき所をかけるハ禽獸也。何事」(二十一才)にても、先達を頼んで学ハすんハ、道を行こと叶ふへからすと、
□を「かいまさくつてかひやめ(見消チカ)」しめして筆をおきぬ。

誹諧の箴(見消チカ)

道ハ神代の和哥にわかれ、教は誹諧諷諫にもとづく。法は祖翁の物好よりならひて、」(二十二才)杖と笠とのかるみに遊ぶ。花鳥に心を慰るにあらず。ころに月雪の清きをすますへし。衣は分を過す、飲は三石の奈良茶を喰らひて、煮豆柚みそのさひを味ふ。やはらきを専とす。嘗て行義をみたすにはあらず。白澤園 「(二十二才)

大社御神燈寄進序

八雲立出雲国大社天日隅宮は、大己貴大神の御鎮座所にて、御神徳の弘大なる事は日本書紀に委しけれハ、今あやにくにのふるもおこかましけれと、ひとつにハ、五穀耕作の祖神、また顕見莫生およひ畜産のために病療の方を定め、」(二十三才)鳥獸昆虫の災異攘はんため、禁厭の法を定め給ふ。そのほかおほよその御功あぐるにいとまあるへからず。そもく伊勢の豊宮にます天照大日靈尊ハ、天上の第一の尊神也。出雲の大社にます国作大己貴大神

ハ、天下第一の尊神に「てましませハ、昔より今に至るまで、かけま
くもかしこき勅願の御社なるかゆへに、貴」(二十三ウ) 躰ともに尊
伝て寄附の品多ありといへとも、わきて御神燈を奉る事ハ神世よりの
旧例なれハ、神事七十余(度)の中にも、春秋の大祭祀、其外毎年六
度の甲子祭にも是を挑て社前を照し奉る也。よて伝心の輩は「一力にも
是を献り、あるハ人数を催して奉れる所の神燈に、をのく」姓名を
書」(二十四才) するし、永く宮庭を輝けし給ハ、万代不易の神忠に
して、子孫繁栄の御祈禱ならんとしか言。

文化九申何月 何日何某 「(二十四ウ)

扇地紙に二人の図を画

猿子雅君ハ、こそ雪のふり初し朝より、花にうかれ、時鳥に更し、
つゝに露ちる秋に至るまで、詠をともしこかねをと□□友なりける
か、おほやけのつとめなれハ、名高き月を見残して、今や河辺に柳を
むすふことにハなりぬ。

我々かちきりを見てや鹿のなく 「(二十五才)

花叔の newly やすみ所をもとめられけるにおくることハ

花橘の木かくれも住あきたりとて、椎の高きをたつねもとめ、岩間の
折々の流れを汲て、こゝに一爐をむすへる人は、世に月花の主といふ
へし。

椎の木のとところ涼し窓の花 「(二十五ウ)

蛇池

坪(家)の蛇池ハ、めぐり十余丁四十八浜、寒水岸にみなきり、其深

きことしる人なし。古松四方に覆ひて、池面、空に藍を揉かことし。

鱗かと思れハ銀杏の落葉哉 「(二十六才)

檜のいほの自省英士に送る

家は積水連山の閑寂にへくりて、檜の庵と呼ふ。本業医門、成相氏の
中興なり。此自省英士や、経年に聖経賢伝をむねとし、禮を守のます
ら男にして、しかも風情を好むの癖あり。華におほろをつゝくるころ
ハ、山野に杖をひきて古人のこゝろを「(二十六ウ) 探り、窓に落葉
のかけくらしき夜は、時鳥をまちて硯の海をうるほす。月下の鹿二紅葉
をあらし、雪見に転ふ所までもと、昔の翁の伝もまのあたりた□□さ
らしや。あるハかこち、あるいハ笑ふて、つゝにことしハ不惑の春に
越え来たりと、おなしきみちの友を集め、賀筵をひろけて、ともに養
老の流を酌んともさされける。予ハ山川「(二十七才) を隔て、此事
の時にあへることのかたけれハ、只一章をもて、祝ひのこゝろをの
へ奉るなめり。

うら若き老や彭祖が菊の苗

美男草

□□にとろ、あり。麻の木立うらやかに、「(二十七ウ) 八ツ手かしハの
葉つくり、錦の華ひらあしたハ宝色にうつくしく、夕ハ白めにも寂
し。かれハ油のこときとろ、をもてるゆへの名にや侍らん。烏羽玉の
黒髪を、櫛にちすちのむすほ、れたる中をもやわらけ、紙漉ける女の
白きたま、たをくゝりて、つゝにハ、たけき武士の心をもなくさむ
ゆへ、紅葉ちりしき鹿なく頃ハ、丸葉ほとん「(二十八才) 実となり
て、世に猿胡麻のうき名はあれと、美男草と呼ハれたるこそ、昔男な

つかしう、汝か面目なめれ。

猿胡麻の井筒にちりてあハれなり

「(二十八ウ)」

庵筆白澤蘭額面の裏

友人広瀬氏春尚のぬし、此〈歳〉月のはしめ、つくしわたひして長崎の津を見めくるに、通辞何某なる人に雅筵の交りものせしつゝてに、かくとさ、やき、かれかはからひもて、もろこし人に対面す。し、まにかねもつきやらぬ身の、た、めつらかなりとおもほゆるにぞ、「(二十九才) やかて、花に月に書集めたるものなと取出して見せしむるに、す、ろによるこほひて、笑える気色なりぬと。かくて、予、号を墨して是を乞へは、やすくと筆を染て白澤蘭の三字を送る。長途のいたつきに倦ことなく、ふところにして家つと、なせハ、予もともにかの国の人にあへるかことく、殆観喜のあまり」(二十九ウ) 自糊して額面となし、草庵調度の一にそなふ。時ハ文化丁丑卯月のはしめ、手銭氏いつ世のあるし雅硯、芒庵の薄の雫に毫を濺きてしるす

□□

「(三十才)」

(以下白紙)

(付記)

本稿作成にあたっては、立正大学 伊藤善隆氏のご論考(「翻刻・手銭記念館所蔵俳諧伝書(一)——手銭記念館所蔵俳諧資料(二)——」(「湘北紀要」三五号、二〇一四年三月)、「百羅追善集『あきのせみ』——手銭記念館所蔵俳諧資料(三)——」(「山陰研究」第七号、二〇一四年二月)、「翻刻・手銭記念館所蔵俳諧伝書(二)——手銭記念館所蔵俳諧資料(四)——」(「湘北紀要」三六号、二〇一五年三月)、「衝冠斎有秀追善集『追善華鬘粟』——手銭記念館

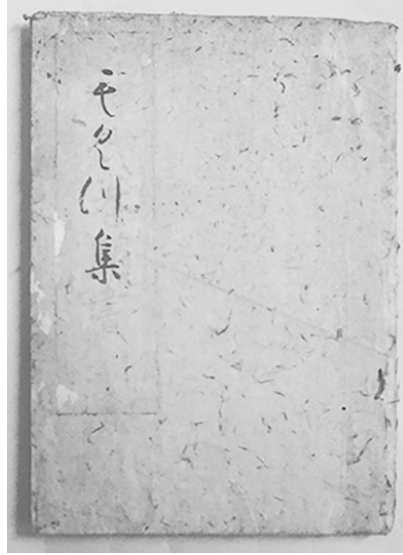
所蔵俳諧資料(五)——」(「山陰研究」第八号、二〇一五年二月)、「俳諧史の中の出雲・大社・手銭家」(平成26年度出雲文化活用プロジェクト報告書)におおいに助けられました。

また、伊藤善隆氏、島根県立古代出雲歴史博物館の岡宏三氏には多大なご助力、ご助言をいただきました。記して感謝申し上げます。

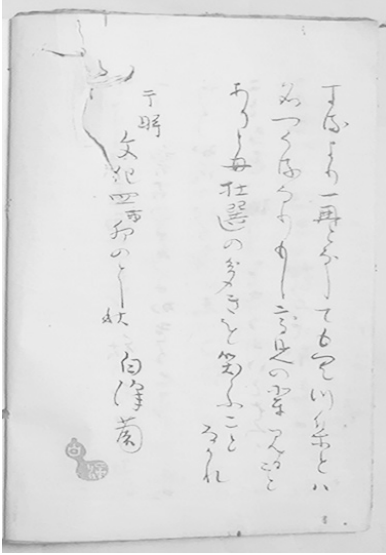
本稿は、山陰研究プロジェクト「山陰地域文学関係資料の公開に関するプロジェクト」(二〇一三～二〇一五年度、代表・野本瑠美)、同「山陰地域文学関係資料の研究」(二〇一六～二〇一八年度、代表・野本瑠美)、国文学研究資料館基幹研究「近世における蔵書形成と文芸享受」(代表・大高洋司)による研究成果の一部である。

〈参考図版〉

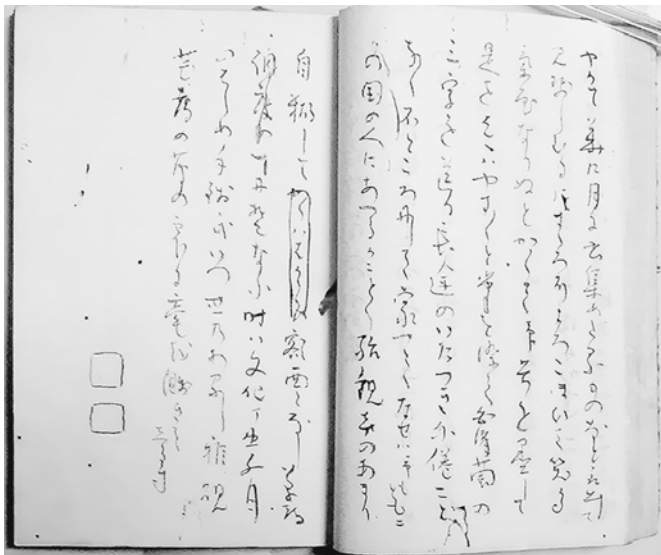
1. 表紙



2. 序文末



3. 本文末尾



“Mokuzu-shu”- reprint and introduction ; Documents of Tezen Family Archives (2)-

SASAKI Anri
(Tezen Museum curator)

[Abstract]

To reprint and introduce “Mokudzu-shu” written by Tezen Arihide. “Mokuzu-shu” is a valuable material to know about haikai poems in the Taisha region of Edo period.

Key-word ; Mokuzu-shu, haikai, Tezen Arihide, Tezen Museum